

---

## 阪神淡路大震災10年後の看護職の心理的影響に関する調査

(川村智子ほか、全自病協雑誌 45: 851-855, 2005)

2016年11月4日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### 【背景】

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は阪神地域に甚大な被害をもたらした。被災地の看護職員は、自らもその被災者であるにも関わらず災害医療活動に尽力した。10年経過した現在（論文作成は2005年）では被災地の復旧は目覚ましく表面上はその爪痕もみられない。看護師も同様に、大震災の後も、他の地域で発生した災害に対して積極的に救援活動に参加しておりこちらも外見的には心の傷は癒えたように見える。震災10年という節目の年を迎えた今、当時の看護職員がその体験を通してどのような心理的影響を受けたのか、また現在の心理面に影響はあるのかを調査した。

### 【結果】

#### 1. 震災時の勤務状況

全壊したN病院が108名（24%）、全壊は免れたが被災状況下で医療活動を行ったT病院・S病院がそれぞれ267名（57%）、62名（14%）

#### 2. 出務状況

震災当日に勤務した人は217名（47%）であり、勤務中を含めると253名（55%）の人が当日に出務して入院患者・被災者の医療に従事した。3日以内に出務できた人は376名（82%）だった。

#### 3. 自宅の被害状況

全壊・全焼が47名（6%）、半壊・半焼が126名（15%）、一部損壊が299名（37%）であり、全体の58%の人が自宅に何らかの被害を受けていた。

#### 4. 精神面への影響

影響がかなりあった・多少あったと感じた人が184名（40%）を占める。

#### 5. 当時の医療活動について

救援活動が十分できなかったと答えた人が89名（19%）、少ししかできなかったと答えた人が120名（27%）であり、全体の46%が活動できなかったと感じている。

#### 6. 震災後の転勤と職場適応

N病院の看護師は震災から2ヵ月半後、転勤を余儀なくされた。転勤をした89名のうち、転勤は意に沿うものだったと答えた人は30名（34%）、そうではなかったと答えた人は59名（66%）だった。

#### 7. 転勤後の適応状況

転勤直後は良好が低い、半年後より良好不良が逆転し、2～3年後には良好が有意に高くなっている。

#### 8. 心理尺度 (IES-R)

PTSD の 3 つの症候群である再体験症状・回避症状・過覚醒症状を調査し、25 点以上をハイリスクとして評価した。その結果、平均が 10.8 で最大値は 88 であり、ハイリスク者は 109 名 (15%) であった。

#### 【考察】

看護師は、被災者であったにもかかわらず震災後 3 日までの出勤率が 82% だったとの結果から、その使命を優先させる傾向がある。震災時に精神的影響を受けた・十分な救援活動ができなかったと感じた人が 4 割いたことから、早い段階での専門家の関わりが望まれる。意に沿わない転勤の職場適応は 3 年後には逆転し適応状況になることから、人間関係は比較的早く順応されると言える。意に沿わない転勤の場合は 2～3 年間のフォロー体制が望まれる。10 年経過した現在でも PTSD 尺度でハイリスク者が 109 名いることにより、人間関係は周囲との調和や支えの中で順応できても、精神的回復には多くの時間を要することを示唆している。よって大規模災害の時には特に精神的回復への支援が専門的に構築される必要がある。